

しょううつしあさがおばなし

生写朝顔話

〔解説〕 天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳

叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）葎松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ道いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔あらすじ〕 宮城阿曾次郎と芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪は、京の宇治で出会い恋に落ちます。折しも阿曾次郎は鎌倉出張の命を受け、別れ際、朝顔の歌を扇に書いて深雪に与えました。

〈船別れの段〉 急遽本国へと引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然阿曾次郎と再会しますが、それも束の間、二人は再び別れ別れとなります。

国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐ様言い渡されます。駒沢次郎左衛門とは、伯父の養子となり名を改めた宮城阿曾次郎だったのですが、それを知らぬ深雪は、思い余って家を出、阿曾次郎を探す旅に出ます。

〈浜松小屋の段〉放浪の末、辛苦から盲目となった深雪は、三味線片手に唄を歌って日々をしのいでいました。やがて深雪を探す乳母浅香と浜松で出会いますが、浅香は深雪を捕まえようとやってきた輪拔吉兵衛と争って深手を負い、島田宿の父を尋ねるように言い残して息絶えます。

〈宿屋の段〉駒沢次郎左衛門は岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊まります。岩代は同じ藩士であるものの悪人の一味で、しびれ薬で次郎左衛門を亡き者にしようと企てますが、宿屋の主人徳右衛門の機転により失敗します。はからずもこの宿で盲目姿の深雪と再会した次郎左衛門でしたが、任務の途中とあって、それと明かすこともできず、万感の思いで深雪の演奏する朝顔の唄を聞き、徳右衛門に目の秘薬を言付けて出立するのです。次郎左衛門が残した扇から、実は阿曾次郎であった事を知った深雪は慌てて後を追います。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

船別れの段

和だつみ
和田海の浪の面照る月影も、明石の浦の泊り船

風待つ種のつれづれを慰めかねて阿曾次郎、舳先に
立ち出で月かげに、四方を見はらす気晴しの、煙草
の煙り吹き靡く船路の旅ぞ物淋し。そばにかゝりし
大船は、秋月弓之助が帰国の乗船、乗り手も水夫も
船草臥、前後も知らぬ高軒
ふかたひれ

娘深雪はたゞ一人、目さへも合はぬ恋人を、思ひ焦
れてうつくと、恋に心をつくし琴、せめて慰むよ
すがもと、搔き鳴らしたる糸調べ

ゝ露のひぬ間の朝顔に、照らす日かげのつれなきに
「テ合点の行かぬ。あの歌は過ぎつる宇治の蜚狩り
に、秋月の娘深雪が扇に 某が、書いて与へし朝顔
それがし
の唱歌。声さへ深雪に生写し。ハテいぶかしさよ」

と見上ぐれば、あなたも見下す月影に、顔はまさし
く

「深雪殿ではないか」

「ヤア阿曾次郎様。逢ひたかつた」

とばかりにてわれを忘れて乗移るを

「オ、嬉しいそなたの志、忘れは置かぬ、さりなが
ら、そなたを今連れ退いては、某が武士道立たず。殊
にこの度伯父の頼みにて、遁れぬ主用。なほもつて
女を同道しがたき入訳。ある縁ならば添ふ時節もあ
らう。かうしてゐては人の咎め。サアちやつと元の
船へ乗つてたも」

「エ、そりや聞えませぬ阿曾次郎様。添はれる時節
もあらうとは、当座遁れの捨て詞。お氣に入らずば
打明けて、包まずそれというてたべ。添はれぬ時に
は渚川へ、たとへ身を投げ死するとも、ふたゝびほ

かの夫迎へ、せぬを誓ひし身の潔白。さらば」

とばかり水底へ、既に飛ばんと立ち上がるを、

あわて驚き抱き止め

「コレ待った。はやまるまい」

「イエ／＼放して殺して下さい」

「ア、是非もなし。それ程にまで思ひ詰めた娘心、

見殺しにマどうせられう。不義いたずらと世の人口、

諺らば諺れ連れて退く。これ尽未来まで女房ぞや」
そし

「エ、嬉しうござんす忝い」

とひつたり抱きつきの夜の、影も隔てぬ比翼鳥、離

れがたなき風情なり。

阿曾次郎ふつと心つき

「このまゝに連れて退かば親達の、もしや淵川へも

身を投げたかと、お歎きあらんは定のもの。委くわしい

様子をつい一筆」

「オ、よういうて下さんした。私もさう思うてゐます。ガどうぞ料紙を貸して下さい」

「オ、心得し」

と懷紙、腰をさぐつて

「南無三宝。そなたを今抱き止むる拍子、海へなにやら落とせし水音。旅矢立をはめてのけた。ア、どうしたらよからうぞ」

「オ、それなら待つて下さんせ。双親はじめつき

ぐ／＼まで、旅草臥の寝入りばな。そつと元船へいんで、一筆書置してきませう」

「ヲ、それよからう。ガコレ必ず物音させて、親達の目が醒めぬやう」

「心得ました」

と立ち上がれば、阿曾次郎は肩車、あなたの船へ乗り移らす

音に目覚ます船頭ども

「ヲ、地嵐が吹出したぞ。いかり碇を上げよ、帆を卷け」

と騒ぎ出せば

『なう悲しや』とあせるうち、船は次第に遠ざかる。

『コハなんとせん、かとせん』とあせるはずみに阿

曾次郎が、船へ投げ込む扇の別れ、後しら浪を隔て

の船、つながぬ縁ぞ

浜松小屋の段

あら尊と導きたまへ観音寺、遠き国よりはるばると、乳人浅香は浅からぬ、欺きも身にぞ笈摺の、深雪の行方尋ねんと、思ひ立つたる巡礼も、辛苦憂き身のやつれ笠、露のやどりも取りかねて、杖を力に歩みより、

「コレ／＼女中、卒爾ながらチトお尋ね申したい」

とおとなふ声に泣き顔隠し

「ヲ、コレハマア／＼どなた様かは存じませぬが、私は目界の見えぬ者、ガマアなにごとのお尋ねぞ」

と、いふ物ごしのつまはづれ、『どうやら尋ぬるその人に似た』と思へど形かたち、『これは非人ことに盲目心の迷ひ』と思ひ返し、

「ホ、／＼、オ、わしとしたことが々鹿相な。目界

の見えぬお人に問ふことは異なるものなれど、もしこの街道を年の頃は十六七、媚かたち人にすぐれ屋敷育ちの大振袖。供をも連れずたゞ一人、通られし様子をば、もし聞きはなされぬか」

といふは、『正しくわが身の上』と、胸騒ぎし『待てしばし、世の中に、似た声の人似たことの、なきさにあらず』と思ひ返し、

「ヲ、それはマア笑止なことや。往来もしげきの衝道、女中の一人旅は幾人といふ限りなし。さやうにお尋ねなされては、なか／＼知れうやうもなし。ガマア国はいづく、名はなんと申しますえ」

「サレバイノ、国は芸州福岡、お名は深雪様」

といふは『いよく／＼乳母浅香、ヤレ、なつかしや』といひたさも『落ちぶれ果てし今の身を、われと名乗るも面伏せ殊にそれぞといふならば、連れていなれ

て父母に、どの顔下げてまみゆべき。罪深きことながら、偽りすかして帰へさん』と、なほしも声をくろまして、

「ヲ、なる程、たしかにそんな噂も聞きたれど、その女中は国を出てよりさまさまの憂き目に逢ひ、やうやう遁れこの辺までは来られしが、どうしたことか四五日前に、渕川へ身を投げて、死なしやんしたとやら」

「ヤア／＼／＼、なにその女中は身を投げてお果てなされしとや、アノ身をハア」

『はっ』とばかりに身を打伏し、前後正体泣きみたる。深雪もともに悲しきの、涙かくして傍に寄り、

「コレ申し女中様。悲しいはお道理ながら、老少不定の世の習ひ、定りごととあきらめて、はやう国へお帰りなされ。後弔うてお上げなさるが仏のため。

海山かけし長の旅、随分怪我のないやうに」

と、いひつゝ立つてかけ小屋へ、探り／＼て入相の、鐘に哀れを添えにける。後に浅香はうつとりと、涙ながらの独り言、

「エ、コレ申し、聞えませぬぞえ深雪様。家出なされしその時も、一言あかして下さつたら、仕様模様もあらうもの。おいとしや奥様は、お前のことを苦に病んで、あけても暮れても泣いてばかり。果ては重き病ふの床、死ぬるいまはの際までも、『どうぞ尋ねて連帰り、せめて位牌に無事な顔を、逢はしてくれ』との御遺言。それゆゑ忌みの明くを待たず国々廻る巡礼も、お前に逢はうばかりじやに、なぜ死んでは下さんした。わしやお位牌へ言訳を、なんとせうぞ」

と身をもだへ、恨みる人は目の前に、ありとも知ら

ぬくどき泣き。聞くに深雪は身も世もあられず、小屋のうちにて齒をかみしめ耳を押へ泣き声せじと喰ひしばる、こらへこらへし苦しさは、骨も砕くるばかりにて、泣くよりもなほつらかりし。

乱るゝ心おししづめ、浅香は涙の顔をあげ

「ア、我ながら愚痴のいたり、いつまでいふても返らぬこと。この上は善提のため、打ち残りの札所を廻り、早ふ国へ帰りませふ。さうぢや／＼」

と立上り、小屋の戸口へさし寄つて、

「イヤ申し女中様。いかいお世話でござりました。モウおさらば」

とゆう月に、別れを告げて行過ぎしが、何か心にうなづきて、木蔭に忍び窺ふとも、知らぬ盲ひの悲しさに、思はず小屋を転び出で、見へぬながらのび上がり

「コレイノコレ浅香。今いふたは皆偽り。尋ぬる深雪はくわしぢやわいの。声を聞いたその時は、飛び立つ様にあつたれどもな、浅ましいくこの形で、ドウマア顔が逢はされふ。とはいひながらわしが身を、よくく大事と思へばこそ、海山越えて憂き苦勞、廻り逢ひは逢ひながら、胴慾にもよそくしう、いふていなした心のうち、どのやうにあらふぞいの。只何事もこれまでの、約束事と諦めて、コレ堪忍してたもくや。取りわけて悲しいは、これ程不孝なこのわしを、やつぱり子ぢやと思召し、身のいたづらを苦に病んで、お果てなされた母様の、死目に逢はぬのみならず、御命日さへ露知らず、はかないことが、エ、マあるかいのふ。思へばく浅ましや。親々の罰ばかりでもこのやうに目がつぶれいでなんとせふ。赦してたべ」

ばかりにて、こらへくし溜め涙『わっ』と叫びて身を投伏し、前後正体泣沈む。立聞く浅香も忍びかね『わっ』と一声泣出せば、『さてはそこに』と深雪が驚き、こけつ転びつ逃げ行くを、すがりとどめて

「コレマアく待つて下さんせマアく待つて下さんせいな。姿形は変はつても、一目にも見違へねども、名乗りかけてもなかくに、明かさぬ氣質と知つたゆゑ、余所事にいひなして、木蔭に隠れて始終の様子、立聞きたも尽きせぬ縁。さりながらこの年月骨身を碎き、やうく尋ね逢うたもの。心強う去なそふとは、そりや胴慾ぢやく。シタガコレ、お氣遣ひなされますな。かう廻り逢うからは阿曾次郎様のありかを尋ね、きつとお逢はせ申しませうふ。ガ、なにをいうてもくは街道」

宿あるかたへ急がんと泣入る深雪をいたはりて、立

宿屋の段

呼び立つる

むざんなるかな秋月の娘深雪は身に積もる、嘆きの
数の重なりて埒失ふ目なし鳥。杖柱とも頼みてし浅
香はもろく朝露と消え残りたる身一つを。さすがに
捨ても縁先の、飛び石探る足元も、危ふき木曽の丸
木橋渡り苦しき風情にて、やうやう座して手をつか
へ

「召しましたはこのお座敷でござりますか。拙い調
べもお笑ひ草。おはもじ様や」

と会釈する顔も深雪がなれの果て

『不便の者や』とせぐり来る、涙飲み込み控へゐる。

岩代はそれとも知らず

「ヤア見苦しいそのさまで我々が目通りへ失せたは、

ア、聞き及んだ朝顔めな。エ、きりきり立つて失せをらう」

「アイヤ／＼岩代殿、さう没義道に仰せられな。この方に呼び寄せたればこそ、思ひがけなう、思ひがけなう来た者を叱るは武士の情にあらず。コリヤ女、大儀ながらその朝顔とやらの歌、サ、早く唄うて聞かせい」

と望む心は千万無量、知らぬ岩代面ふくらし

「テサテ駒沢氏にはイヤモきついご執心。コリヤコリヤ盲。何なりとも唄へ唄へ」

「サ、早く早く」

「ハイハイハイ唄ひますでござります」

と焦がるゝ夫のあるぞとも、知らぬ盲の探り手に、恋ゆゑ心つくし琴、誰かは憂きを斗為吟の、糸より細き指先に、さす爪さへも八ッ橋のやつれ果てたる

身を託ち、涙に曇る爪調べ

ゝ露の干ぬ間の朝顔を、照らすひかげのつれなきに、哀れ一村雨のはらはらと降れかし

「ム、夫を慕ふ音律の我々が身にも思ひやられて、思はずも感涙致した。ナウ岩代殿」

「いかさま琴と言ひ器量と言ひ、イヤモなかなか感心仕る。イヤナニ朝顔とやら、そこは定めて冷えるであらう。身共が側で今一曲。サア所望だ所望だ」

「ア、イヤ岩代殿、もう赦しておやりなされい」

「さりとは駒沢氏、身共が望むを止めさつしやるは、そりや意地の悪いと申すもの」

「イヤさうではござらねども、彼も定めて疲れませうと存じて」

「ハハアしからば曲は止めにしてコリヤコリヤ女。そちも腹からの非人でもあるまい。身の上話もまた

一興。話して聞かせ、サどうだどうだ」

「ハイハイよう問ふて下さります。お詞に甘えお話し申すも恥づかしながら、もと私は中国生まれ、様子あつて都の住居。一年宇治の螢狩りに焦がれ初めたる恋人と、語らふ間さへ夏の夜の短い契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ国の迎ひ。親々に誘はれ難波の浦を船出して、身を尽くしたる憂き思ひ、泣いて明石の風待ちに、たまたま逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹き分けられ、国へ帰れば父母の思ひも寄らぬ夫定め。立つる操を破らじと、屋敷を抜けて数々の憂き目をしのぎ都路へ、上つて聞けばその人は、東の旅と聞く悲しさ。また都を迷ひ出で、いつかは巡り逢坂の関路を後に近江路や、身の終はりさへ定めなく、恋し恋しに目を泣き潰し、もののあいろも水鳥の陸に彷徨ふ悲しさは、

いつの世いかなる報ひにて、重ね重ねの嘆きの数、
憐れみ給へ」

とばかりにて、声を忍びて嘆きける

「テサテ哀れな話。しかし男日照りもない世界に、エ、気のせまい女だな。イヤモしゆんだ話で気が滅入つた。寝酒でもたべ気を晴らさう。イヤナニ女、暇をくれる立ち帰れ」

「ハイハイ有難うござります。左様なればお客様。もうお暇申します」

「ヲ、朝顔とやら大儀であつた。初めて聞いた身の上話。もしその夫が聞くなれば、さぞ満足に思ふであらう。ノウ岩代殿」

「左様左様」

「ハ、アこれはまあ御親切なお詞。有難う存じます」
と杖探り取り立ちながら、虫が知らずか何とやら、

耳に残りし情けの詞、名残惜しさに泣く泣くも、心は後に探り行く。折ふし奥より若侍。

「もはやよほど深更に及び候。御両所ともにはやお休み」

「いか様、明日は正七つの出立イザ駒沢氏。お休みなされぬか」

「イヤ拙者は今暫し用事もござれば、お構ひなくお先へ」

「左様なれば御先へ臥せらう。ドリヤ、ム、ハ、ヤ、御免下され」

と立上りしが、胸に一物、心をあとに奥の間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遅しと駒沢は、手を鳴らして女を呼び

「コリヤコリヤ徳右衛門に急々対面したし。呼んでくりやれ」

と言ひ付けやり、旅硯の墨すり流し、以前の扇押し開いて、何か書き付け用意の金子、薬の包み取り認めるその所へ、廊下伝いに来かゝる亭主、それと見るより手をつかへ

「只今召しましたは何の御用でござります」

「ヲ、徳右衛門、折入って頼みたきは先刻の朝顔といふ女、今一応呼び寄せてたもるまいか」

「ハイ畏まりましたはござりますが、彼はすぐに清水と申す方へ参りました。ご用事ならば呼びには遣はしませうが、ア、どうで今夜のお間には」

「ム、残念至極。身は正七ツの出立、マよくよく縁の」

「エ、何と御意なされます」

「アイヤナニ徳右衛門。今の女に謝礼のため、この三品をその方にしつかりと預け置く間、朝顔が参ら

ば渡してくりやれ」

「ハイハイ。ヲ、コリヤマア夥しいお金。その上結構な女子扇、お菓までも」

「ヲ、サその菓は大明国秘法の目菓。甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、いかなる眼病も即座に平癒。朝顔に渡してくりやれ」

「これはこれは何から何まで、お心を籠められた下されもの。参り次第相渡し悦ばしませう」

と受け取る折しも時計の七ツ。

「ム、アリヤもう七ツの刻限」

と数ふるうちに岩代多喜太、装束改め旅出立、同勢引き連れ立ち出でて

「イザ駒沢氏、出立仕らう」

と勧むる詞に次郎左衛門、衣服繕ひ立ち出づれば、見送る亭主が暇乞ひ心をぐはぬ駒沢、岩代、打ち連

れてこそ出でて行く。後見送つて徳右衛門

「ハ、ア、同じ侍でも黒白の違ひ。意地くね悪い岩代に引きかへ、情深い駒沢様。ア、あっぱれの侍ぢやなあ。それはさうと朝顔に、今夜の礼にはそぐはぬ下され物。ハアなんぞ様子のありそなこと」

と思案の折から、深雪は何か気にかゝり、座敷しもうてうとうとと、又立ち帰る切戸の内、徳右衛門目早に見て

「ヲ、朝顔か遅かつた。宵のお客様がもう一度呼びにやつてくれいと仰つたれど、清水へ去たと聞いたゆゑ、お断り申したれば、今の先お立ちなされた。しかしまあ悦びや。大枚のお金と扇、また結構な目菓、わが身にやつてくれいとお預けなされたわいの」

「これは冥加に余る事。お礼申さいで残り多い。ガ申し旦那様。この扇に何ぞ書いてはござりませぬか。

ちよつと見てくださりませ」

「ヲ、ドレドレ。エ、金地に一輪朝顔。露の干ぬ間が書いてある。裏に、宮城阿曾次郎こと駒沢次郎左衛門、と書いてあるぞや」

「エ、アノ宮城阿曾次郎こと駒沢次郎左衛門とその扇に」

「ヲイノ」

「ハア、」

『ハツ』とばかりに俄の仰天

「エ、知らなんだ知らなんだ知らなんだわいなあ。

道理でよう似た声と思うたが、そんならやつぱり阿曾次郎様であつたか。申し申し旦那様、そのお客様はいつお立ちなされたえ」

「ヲ、今の先の事ぢやが、わが身はまたお馴染みか」

「エ、馴染みどころか、年月尋ぬる夫でござんすわ

いな。かう言ふ内も心が急く。追つ付いてたつた一言」

と行かんとするを引き留め

「ア、コレマア待ちや待ちや。折悪う雨も降り出し、この暗いに一人は危ない危ない」

「イエイエたとへ死んでも厭ひはせぬ」

「サ、それはさうでも盲の身で、危ない危ない」

「イエイエ放して下さんせ」

「これはしたり危ないと言ふに」

「イヤイヤ放して放して」

と突き退けはね退け、杖を力に降る雨の、いつかな厭はぬ女の念力、後を慕うて